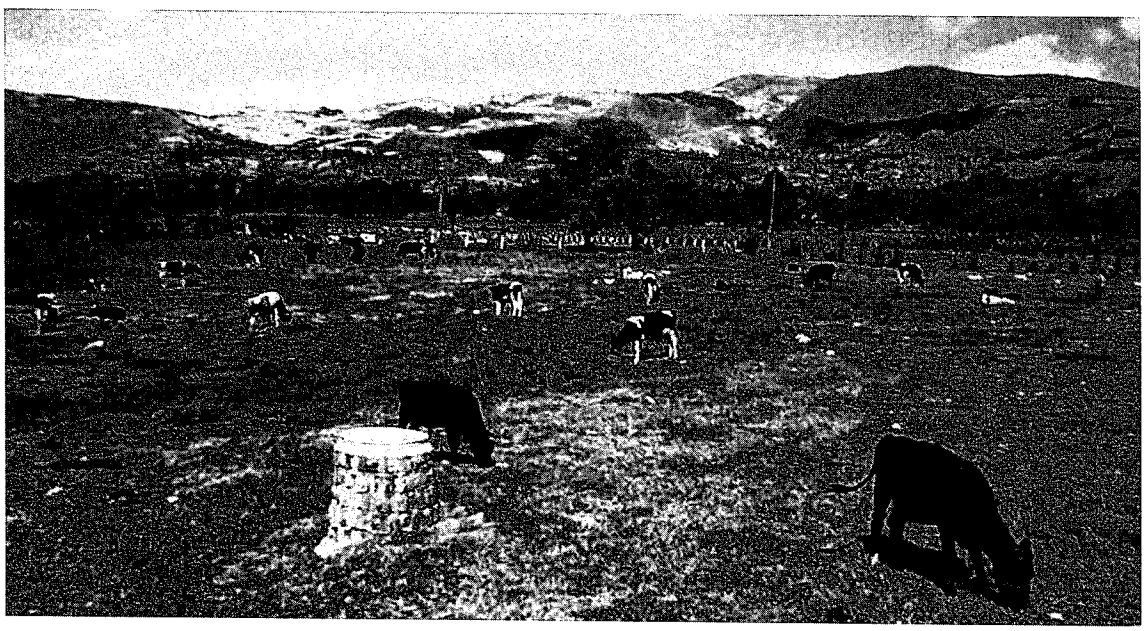
現地報告 ペルー

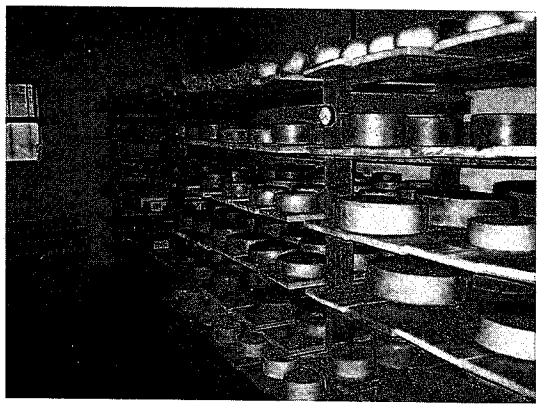
観光を活用した農業の開発
アグロツーリズムの試み

清水達也

ペルーでの観光といえば，インカ帝国の遺跡のあるクスコ，マチュピチュ，葦船のチチカカ湖，そしてナスカの地上絵などがよく知られている。ユネスコの世界遺産の数も南米ではブラジルに次いで多い10カ所と観光資源が豊富な国である。この国を訪れる外国人観光客は1990年代初めには年間20万人程度であったが，政治・経済の安定，観光基盤の整備とともに増加し，その数は99年には90万人に達した。しかしこの数字はメキシコの1900万人やブラジルの510万人はもちろん，チリの160万人と比べてもかなり少ない数字である*。今年７月末に発足した新政権は観光の振興を重点課題としており，５年のうちに外国人観光客を300万人まで増やすことを目標としている。



カハマルカ市郊外の牧草地



カハマルカ市郊外、コルパ農場の直売所（上）とアルプス農場のチーズ工場（左）

観光客の増加を目指して，従来の観光地の振興はもちろん，新しい観光資源の開発も行なわれている。本稿ではそのうち，農業や農村の開発と観光を結びつけた「アグロツーリズム」を取り上げ，政府機関や大学，開発援助機関による試みを紹介する。

＊ 世界観光機関（World Tourism Organization：http://www.world-tourism.org/）の統計による。

体験型観光の振興

アグロツーリズムとは，農村や農園を訪れて農作業を見たり体験したり，収穫した農産物を味わったり，農民との交流によりその地域の伝統や文化を知る活動の事を指す。ヨーロッパでは最近知られてきているが，ペルーではまだ一般には認知されていない。

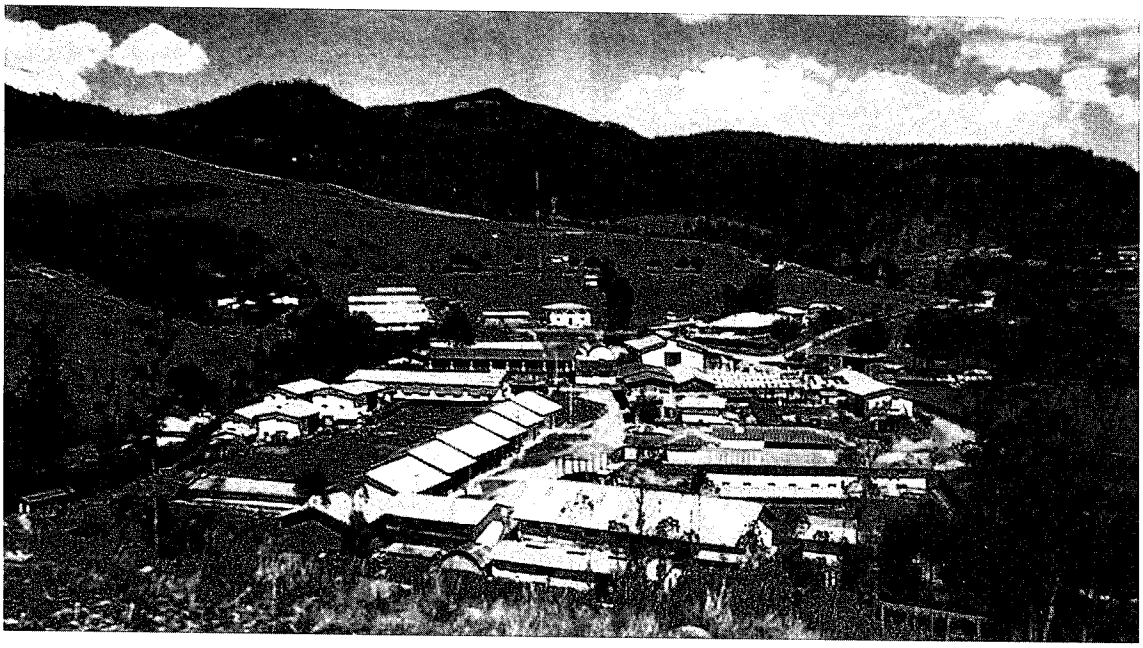
外国からのペルーに対するイメージの向上と観光や投資の促進を目的とする政府機関，ペルー振興委員会（通称プロムペルー）は，このアグロツーリズムを始めとして，自然や伝統・文化を保護しながら観光客がこれらを楽しめるような体験型観光の振興を数年前から行なっている。欧州連合の援助を受け，観光地の自治体や住民組織，NGOなどと共同で，現在ペルー国内で七つのパイロット・プロジェクトを進めている。本稿で紹介するカハマルカ県のポルコン農場のほか，アンデス山中をリャマ（高地に住むラクダ科の動物）と歩くツアーや，クスコ近郊の聖なる谷地域で塩田や段段畑での作業や伝統的なお祭りに参加するツアーの開発に取り組んでいる。

協同組合の収入安定化

カハマルカ・ポルコン農場

ペルー北部の山岳地域に位置するカハマルカ県は，南部のアレキパ県と並んで国内では酪農産業の盛んな場所として知られている。標高2750メートルに位置する県都カハマルカ市の郊外には，緑の牧草地に乳牛が放牧されている景色が広がっている。市内の旅行代理店が提供しているカハマルカ市近郊の見所を回る日帰りの観光コースには，コルパ，トレス・モリノスといったかつてのアシエンダ（大農園）訪問が組み込まれていて，農園主の家や酪農作業，乳製品の製造を見学できる。とくに夕方になると放牧地の牛が集められて，名前を呼ばれた順番に牧舎に入る行事は観光客に人気がある。農園内の売店では絞りたての牛乳で作ったヨーグルト，チーズ，バター，マンハー・ブランコ（牛乳に砂糖を入れて煮詰めたペースト状の食べ物）などの乳製品が手に入る。

このような観光農園のほかに，カハマルカ市か



ポルコン農場の中心。集落の向こう側に植林をした松林が広がる。

ら北へ約30キロにあるポルコン地区にはプロムペルーが振興しているアグロツーリズム拠点の一つ，ポルコン農場がある。3200メートルという標高のためこの周辺の山々はユーカリの木がまばらにあるだけでほとんど草しか生えていないが，ポルコン農場は25年前から松を中心とする植林を続けており，緑に覆われた9200ヘクタールの山々がとても美しい。ここにはラクダ科の動物でアルパカよりも高級な毛がとれることで知られているビクーニャが放し飼いにされており，間近に見ることができる。カハマルカ市から日帰りで，農場内のミニ動物園を見たり，酪農製品の製造を見学したりする観光客が多いが，2年前に建てられた観光客向けのロッジで宿泊すれば，馬で農場内を散策したり，牛の世話や搾乳をしたり，ジャガイモの収穫などの農作業に参加することができる。農場内の養殖場でマス釣りも楽しめる。

ペルー北部山岳地域では，1960年代末に始まった農地改革により作られた農業協同組合が80年代に入り次々と解体していったが，ポルコン農場では組合長のアレハンドロ・キスペ氏のリーダーシップにより共同所有・共同経営を維持，現在でも「アタワルパ・ヘルサレム労働者農業協同組合」として約60名の組合員とその家族が働いている。農民が組織化されていることで欧州諸国から酪農や林業の技術援助を受け入れることに成功し，周辺の村落に比べると大きな発展を遂げ，協同組合が成功した数少ない例として知られている。また，協同組合では収入の安定を図るために事業の多角化を進めており，当初は種イモを含むジャガイモの販売と大手食品企業への牛乳の販売が主な収入源であったが，最近では植林によって得られた木材を利用した家具の製造販売による収入が増えている。アグロツーリズムもこの一環で，長年の植林によって実現した美しい森林を売り物に，農業や酪農の体験を組み合わせることで観光客の誘致をねらっている。

暖炉もある観光客向けのロッジと協同組合長のキスペ氏

農村開発プロジェクト

ワンカヨ有機栽培農家訪問

リマ市のカトリカ大学工学部内にある「農村支援グループ」（通称グルポ）は，農村部の持続的開発を目標として適正技術や代替エネルギー源の開発と普及，有機栽培の促進，環境保全のためのプロジェクトなどを行なっている。その活動に観光の要素を組みこんだエコツーリズム，アグロツーリズムを2年前から始めた。

筆者はグルポが募集した旅行に参加して，中部山岳地域の中心都市であるワンカヨ市に3日間滞在した。手工芸品村や湖などを訪ねる従来からの観光と，近郊の農村に有機栽培農家を訪ねるアグロツーリズムを組み合わせた旅行である。これは，貧困削減のために米国際開発庁（USAID）とペルー経団連（CONFIEP）が共同で設立し，企業活動を促進することで農家の所得の向上を目指す「貧困削減プロジェクト」（プロジェクト・プラ）がグルポやワンカヨ市内の旅行代理店と共同で開発したものである。

農村訪問は2日目。朝9時過ぎにマイクロバスで市街を出るとすぐに農村地帯に入る。ワンカヨ市のあるフニン県のマンタロ川流域はペルーでも有数のジャガイモの生産地であるが，訪問した6月末にはすでに収穫が終わっていたので畑にはほとんど緑がなかった。標高3000メートルを超えるこのあたりの山々はほとんど木が生えておらず，乾季の最中だったので枯れた草の色をした山々が遠くまで広がり，ところどころにある小麦やトウモロコシの畑がパッチワークのように見える。途中の村で見学した土曜市では，二十日大根に似た植物で滋養強壮に効果があるとされるマカやコカの葉，羊の頭などさまざまな品物が売られていた。

われわれがまず訪ねたのはワンカヨ市から1時間弱の距離にあるチョンゴス・バハ村のヘスス・ロハス氏。3年ほど前からNGOの指導で有機栽培を始め，この地区のリーダーとして普及を呼びかけている。この辺りはワンカヨ市という大きな都市に比較的近いため，農業には化学肥料や農薬が広く使われている。これを牛糞や草などから作った堆肥や，虫に対して毒性を持つ草を使った自家製の殺虫剤に置き換える有機栽培の活動についてロハス氏が説明をしてくれた。お土産にくれたジャガイモは少し虫が食っており，見た目はお世辞にもきれいだとはいえないが，「虫が食っているということは，有害な殺虫剤を使っていないという証拠」とロハス氏は胸を張っていた。

次に訪ねたのはそこから砂埃の舞う未舗装道路

カトリカ大学のアグロツーリズム参加者

を40分ほど走ったトレス・デ・ディシエンブレ村のレオニシオ・バルタサール氏。自宅も含めた1.5ヘクタールの敷地で，トウモロコシ，イモ類，青物野菜を自家用に栽培するほか，4頭の乳牛や食用のクイ（天竺ねずみ）の飼育，養蜂などの混合農業を手がけている。主な収入源はチーズやマンハー・ブランコなどの乳製品，蜂蜜，クイの販売という。ここでもバルタサール氏から有機農業への取り組みについて説明を聞き，農場の内部を案内してもらった。その後，近くの養殖場でとれたマスのフライに畑のジャガイモで昼食をとり，お土産にマンハー・ブランコを購入した。

カトリカ大学のグルポでエコツーリズム，アグロツーリズムを担当するエミリオ・ディアス氏によると，同グループが企画した活動には日帰りのツアーも含めてこれまでに延べ500人が参加したという。参加費用は2泊3日のツアーで100ドル程度，ペルーの最低賃金が月410ソル（約120ドル）であることを考えると決して安くはない。グルポでは外国からの交換留学生や，同大学を卒業した20～30代の比較的所得が高い層を対象に宣伝しているという。

元アシエンダを観光に

チャンカイーヨ・アスパラ農場

リマの北95キロ，チャンカイーヨの宿泊施設「コンドール・ソロ」があるサンタ・アナ農場は，20ヘクタールの農地でアスパラガスやみかんを栽培するほか，小規模の酪農を営んでいる。使われていなかったジャガイモの乾燥工場を改造した宿泊施設に観光客を収容し，食堂ではチーズやアスパラガス，果物類など農場内で取れた食材で作ったメニューを提供している。

この農場は，以前は現オーナーのサミュエル・モランテ氏の祖父が所有する1200ヘクタールのアシエンダであったが，1960年代末の農地改革で政府に接収され，同氏の父がそのわずか一部を取り戻した。その後，モランテ氏は農場経営のほかに肥料や農薬など農業資材の販売店やジャガイモ乾燥工場，軽飛行機による農薬散布の会社などを手がけたものの，経済状況の悪化や天候不順による農業への影響により農場と販売店以外は閉鎖した。その時に現在の共同経営者であるマルコ・ポーロ氏が旅行業界での勤務経験を生かしてアグロツーリズムの話を持ちかけ，地元の自然保護活動

コンドール・ソロの乳牛

に以前より積極的に参加してきたモランテ氏もこれに賛同して施設を提供した。

農場では牛の乳搾りのほかに，朝5時半に起床して搾りたてのまだ生暖かい牛乳を近くの町で販売するのを手伝った。そのほか，車で2時間ほどのリマ県の山岳地域に出かけアンデスの段段畑での農作業の様子を観察したり温泉につかったりしたほか，農場から15キロのところにあるラチャイの丘では，砂漠にもかかわらず季節的に発生する濃い霧の水分のおかげで辺り一帯が緑に覆われる自然保護区も訪ねた。

農場内で付加価値をつける

これまで集荷業者や地元の市場を対象に比較的低い価格で販売する農産物が主要な収入源だった農民にとって，観光から得られる現金は魅力的な収入源である。チーズやバターの直販に見られるように，収穫物を加工して付加価値をつけて農場を訪れた観光客に販売すれば，収穫物をそのまま集荷業者や市場に販売するよりもかなり大きな収入を得ることができる。たとえば牛乳は乳業会社に販売すると1リットル当たり0.9ヌエボ・ソル（約30円）にしかならないが，6リットルの牛乳を使って作った1キロのチーズは18ヌエボ・ソル（約620円）で観光客が買っていく。これらの農産物加工は雇用を創出し，農家収入の安定化に結びつく。

このように，アグロツーリズムは新しい観光資源の開発という側面のほかに，農民の所得向上や農村開発にも結びつく側面を含んでいる。現在ペルーではテロ活動の終息や地方道路の発達によって外国人観光客だけでなく国内の観光客も増加しつつある。クスコ，マチュピチュ，ナスカといった代表的な観光地に加え，ペルー東部ジャングル地域のネイチャーツアーやマチュピチュを徒歩で訪れるインカ道トレッキングなど観光の需要も多様化している。そのような流れの中でアグロツーリズムも新しい選択肢の一つとして注目されれば農村の開発にも貢献するだろう。

＜関連資料＞

ペルー振興委員会（プロムペルー）（http://www.peru.org.pe ── 2001年9月）

カハマルカ・ポルコン農場（http://www.geocities.com/porconperu ── 2001年9月）

ペルー・カトリカ大学農村支援グループ（http://www.pucp.edu.pe/invest/grupo ── 200年9月）

（しみず・たつや／在リマ海外派遣員）